



TITLE:

元朝江南行臺の成立

AUTHOR(S):

堤, 一昭

CITATION:

堤, 一昭. 元朝江南行臺の成立. 東洋史研究 1996, 54(4): 653-684

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154550>

RIGHT:

元朝江南行臺の成立

堤 一 昭

はじめに

第一章 行臺設立にいたる過程

(1) 南宋遠征軍の形成とその首脳

(a) 荆湖、淮西軍團

(b) 五投下軍團

(c) 淮東軍團

(2) 南宋遠征軍の再編

(3) 臨安・揚州陷落後の南宋遠征軍

(a) 軍團の長の歸還とシリギの反亂への出撃

(b) 江南殘留の將軍たちによる行省の形成

(c) センウの歸還と行臺の設立

第二章 行臺の活動とその構造

第三章 江南支配における行臺の重要性

むすびにかえて

はじめに

上その命を閉じた。ここに宋金對立以來約一五〇年ぶりの中國統合が實現することになった。江南を手にいれたモンゴル政權・元朝は、その富を背景にムスリム商人と結びつき、海上貿易振興にのり出していく。こうして「モンゴルの平和」は海陸を覆い、ユーラシアを循環する交通路が活況を帶び、東西の人物・文物の交流もこれまでになかったほどの規模を持つようになる。このように考えると元朝の江南支配の成立は、中國史上の重要性のみならず、世界史上も重要な意義を持つと言えるだろう。

ところが、元朝の江南支配に關する研究は、いままで十分になされてきたとは言いがたい。個々のテーマには既にすぐれた業績がある。しかし江南支配の成立期、すなわち南宋征服から統治體制を作りあげていく時期の研究は、前田直典氏が江南四行省の成立について素描を試みた以外、膨大な原典史料に基づく徹底した基礎研究は、まだなされていないのが實情である。⁽¹⁾

筆者は上記の認識に立ちつつ、江南支配の成立期の検討を行ううち、江南行臺が、元朝の江南支配體制を考える際に重要であると考えに至った。江南行臺は、ジャライル國王家の都元帥センウ（相威）⁽²⁾を御史大夫として、至元十四年（一二七七）七月、揚州に設立されたものである。これまで江南行臺の官制の大概について検討がなされたことはあるが、成立に關わる政治面からの研究はまだなされていない。

以下、第一章では江南行臺がどのような過程の後に成立したのか、第二章では江南行臺は何をしたのか、どのような構造であったか、第三章では江南行臺が江南支配の上でなぜ重要なのかを順に論じていきたい。第一章では南宋遠征軍の構成と變遷を論じるが、それが江南行臺と江南の行省の形成過程を知ることになるからである。行臺・行省の江南支配における配置・地位・機能・人的構成などには、形成期のそれらが當然ながら反映している。江南支配體制解明のためには不可欠の作業である。すでに宋元間の戦争については專著があり、襄陽陷落後の南宋遠征を含めて、個々の戦役についてまで極めて詳細な研究が行われている。⁽⁴⁾ それにも関わらず、南宋遠征軍の系統と將軍の出自・統屬を示す基礎的な作業、さ

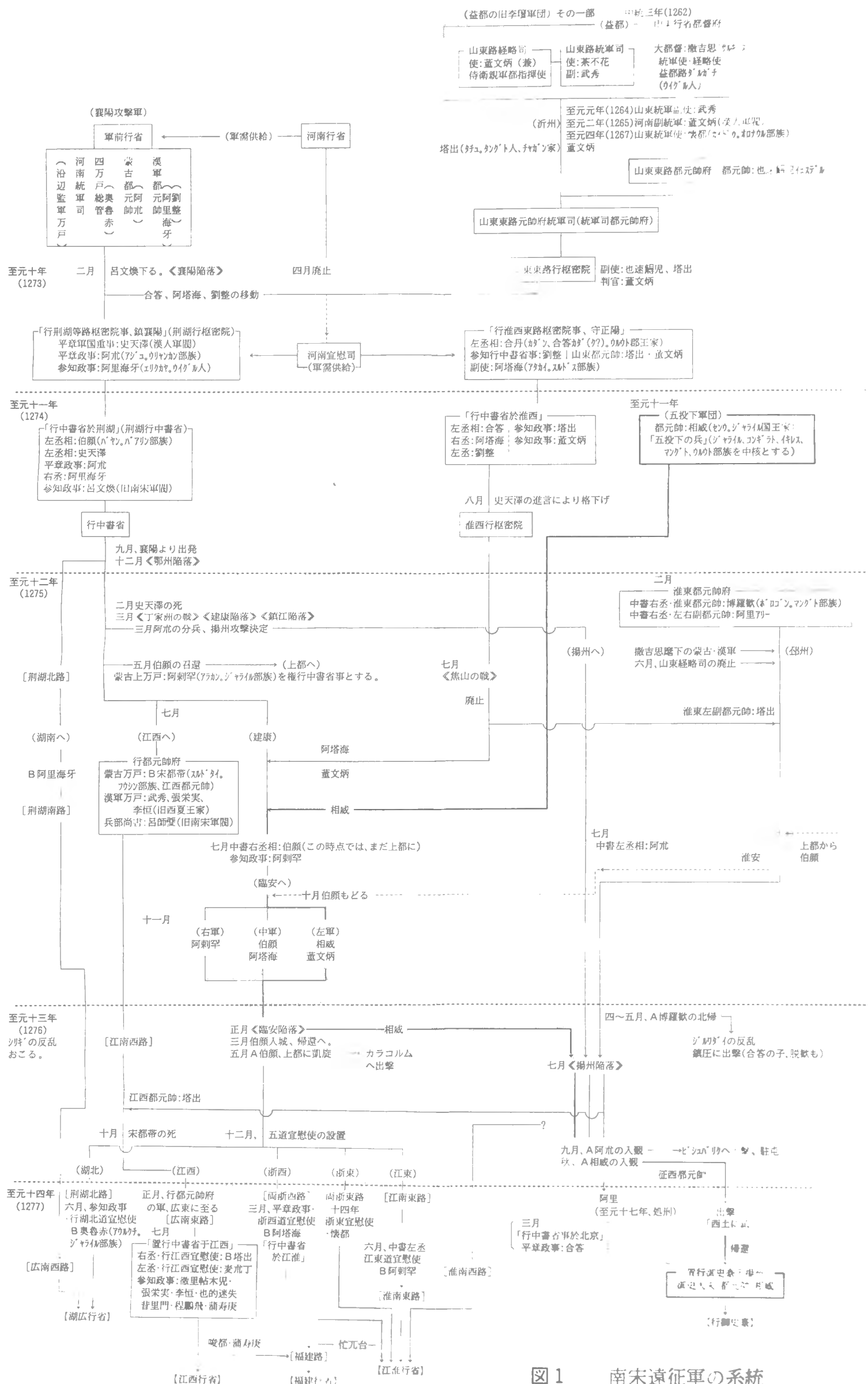


図1 南宋遠征軍の系統

らにそれらによる行臺・行省の形成までを見通した研究はない。

なお本稿で「江南」というのは、舊南宋領のうち四川を除いた部分を指す。四川は、モンゴル支配の中では、陝西・甘肅・ティベト・雲南とともに一つの大地域ブロックを形成した。また、そもそも四川の攻略・支配に向かった人脈自體が江南と全く別個であり、獨立して考察する必要がある。「南宋遠征軍」と言う場合も四川方面以外のものを指す。また、江南行臺が「江南諸道行御史臺」と稱されるのは一二九七年になってのことで、⁽⁵⁾それまでは「行御史臺」「行臺」と呼ばれていた。本稿表題では、通稱として江南行臺とした。以下の文中では主として「行臺」と呼ぶ。

本稿が、元朝史のみならず、ユーラシア東西に廣がる、文字どおりの世界帝國であったモンゴル國家の研究にとって、もっともポイントとなる南中國の問題について、有效な視野と糸口をあたえることになれば幸いである。

第一章 行臺設立にいたる過程

江南行臺はどのような過程の後に設立されたのか。この問題を、襄陽陷落後の南宋遠征軍の構成と變遷を検討することにより考えたい。至元十年（一二七三）二月の襄陽陷落から考察をはじめるのは、この後に南宋遠征軍の編成が行われ、その遠征軍の構成が、行臺や江南の行省の成立と密接に関わるからである。

南宋遠征軍はどんなものであったのか。南宋遠征軍の、襄陽陷落後の編成から行臺の設立にいたるまでの系統を「圖1 南宋遠征軍の系統」に示した。この圖は『元史』の本紀・志・列傳をはじめ、經世大典佚文など政書類、文集・石刻書に載る關係者の碑志傳狀などからの情報を集成して作成したものである。上から下へと年次を追い、ほぼ左が西、右が東となる。四角で囲んだ部分は各時點での軍團首腦部の構成が分かる所である。行臺の形成に関わる部分は太線で示した。

〔内は舊南宋の路名である。A・Bの印を附した將軍については本章(3)で觸れる。萬戸以下の將軍は、軍の首腦となった者以外は示していない。彼らの動向はさらに複雑で示しきれないためである。なお、作圖には煩瑣な考證を必要とする部

分があるため、それは今後稿を改めて論ずることとし、以下の行論では必要な部分のみ典據を挙げる。

(1) 南宋遠征軍の形成とその首脳

襄陽陥落後の南宋遠征軍は、荊湖・淮西・五投下・淮東の四つの軍團より成っていた。時期により「荊湖行樞密院」「荊湖行中書省」「行中書省」と稱される軍府麾下にあるのが荊湖軍團である。「淮西行樞密院」「淮西行中書省」の下にあるのが淮西軍團である。都元帥センウ（相威）の麾下にあるのが五投下軍團であり、「淮東都元帥府」の下にあるのが淮東軍團である。後に述べるように淮西軍團と五投下軍團の行軍路は一致するので、襄陽からの荊湖軍團、淮水沿岸の正陽からの淮西、五投下軍團、そして山東からの淮東軍團というように、モンゴルに伝統的な三軍方式を踏襲した形になる。⁽⁶⁾

つぎに、これら四軍團がどのように形成されたか、またその長はだれであったかを述べてゆきたい。まず、襄陽攻撃軍を母胎として形成された荊湖・淮西二軍團からはじめる。

(a) 荊湖、淮西軍團

襄陽陥落後、至元十一年九月に荊湖軍團が襄陽を進發して南宋遠征が再開されるまで、襄陽攻撃軍を主とする編成が二度にわたって行われた。

一度目の編成は至元十年四月である。『元史』卷八、世祖本紀には次のようにある。

「四月癸未朔、詔して河南等路行中書省を罷め、平章軍國重事史天澤・平章政事阿朮^{アジュ}・參知政事阿里海牙^{アリヘカヤ}を以て荊湖等路行樞密院の事を行し、襄陽に鎮せしむ。左丞相合丹^{カメン}・參知行中書省事劉整・山東都元帥塔出^{タシュ}・董文炳は淮西等路樞密院の事を行し、正陽を守らしむ。

襄陽攻撃軍への軍需供給を行ってきた河南等路行中書省が廢止される。そして軍前行省はかから成る襄陽攻撃軍は二分され、襄陽と正陽にそれぞれ荆湖と淮西の行樞密院が置かれた。⁽⁷⁾ 荆湖と淮西軍團の形成である。

襄陽にそのまま駐屯する荆湖軍團の首腦は、長が史天澤・次いでアジュ(阿朮)・エリクカヤ(阿里海牙)の順であったと考えられる。史天澤はトゥルイ家の所領であった河北眞定の漢人軍閥の出身であり、クビライ政權に重用された。至元四年には中書左丞相、八年には平章軍國重事に進んだ。アジュが平章政事、エリクカヤは參知政事である。當時は中書省の官を帯びることが、文武の階官とともに、その人物の政權における地位を表す役割をも果たしていた。したがって、中書右丞相、平章政事などが行樞密院の首腦であることに不思議はないのである。なお、アジュはウリヤンカン部族出身、襄陽戦では蒙古都元帥。祖父がスベエテイ、父がウリヤンカダイという武人の名門である。アジュ自身はクビライのケシクの將軍であったが、李璫の亂鎮壓に向向した後、河南方面の「蒙古・漢軍」を率い、南宋軍と對峙することになったのである。⁽⁸⁾ エリクカヤはビシュバリク出身のウイグル人。即位以前のクビライの知遇を得てから登用され、襄陽戦では劉整とともに漢軍都元帥であった。⁽⁹⁾

淮西行樞密院のある正陽は淮水兩岸に跨り築かれた要塞都市である。この淮西軍團は、襄陽攻撃軍の一部が山東の軍團を新たに統屬下において構成されたものである。襄陽攻撃軍からはカダアン(Catagan 合丹、もしくは合答、カダク Catag)、アタカイ(阿塔海)、劉整の三人の將軍が淮西に移動した。平章政事として軍前行省首腦の一人であったカダアンが左丞相としてこの軍團の長となった。彼は「五投下」の一つウルウト郡王家當主の地位にある要人である。それに次ぐのがスルドス部族の千戸長タガイの孫、アタカイと劉整である。劉整はもと南宋の將軍で、四川で中統二年にモンゴル側に投降した人物である。襄陽攻撃では漢軍都元帥であった。⁽¹⁰⁾

舊李璫軍團に起源を持つ山東の軍團「山東東路行樞密院」からはタチュと董文炳麾下の軍が淮西軍團に屬することになった。タチュはタングト人でチンギス・カン自身の千戸を管理したチャガンの傍系子孫であり、山東に向向する前はクビ

ライのケシクにいた。⁽¹¹⁾董文炳は、河北藁城の漢人軍閥出身でクビライの知遇を得てから擡頭した人物である。⁽¹²⁾益都に残留したイエスデルの率いた軍も舊李璫軍閥であり、南宋遠征終了後に河西のチャガタイ王家チュベイ麾下にさらに轉用されることになる。⁽¹³⁾

荆湖・淮西兩軍閥の軍需供給にあたるのが至元十年九月に設立された河南宣慰司である。先に廢止された河南行省の後身と考えられる。⁽¹⁴⁾

南宋遠征軍の編成は續く。至元十一年に荆湖軍閥の三人の首腦史天澤、アジュ、エリクカヤがクビライのもとに赴き、至元十一年正月に今後の南宋遠征の方針について協議した。

エリクカヤとアジュは、襄陽陷落の勢いに乗って一氣に南宋征服を實行すべきことを主張する。當時、中央アジア情勢の緊迫化からクビライはいささか消極的であった。⁽¹⁵⁾すぐには決斷せず、史天澤をも呼んで可否を検討させた。史天澤は、南宋征服のためには現在の軍の首腦のままではなく、中書右丞相アントムか、中書左丞相バヤンのような重臣を全軍の總司令官とすべきである。そして老齡の自らは副將の任ならば果たし得ると答えた。これを受けてクビライはバヤンを起用して南宋遠征を行うことを決定する。⁽¹⁶⁾

この決定を受けて、三月に荆湖と淮西の二行樞密院が行中書省に改められる。首腦たちが帶びた中書省の官により、彼らの序列が判明する。荆湖軍閥は左丞相のバヤンと史天澤が長であり、平章政事アジュ、右丞エリクカヤ、參知政事呂文煥の順であり、淮西軍閥は左丞相カダアンが長、右丞アタカイ、左丞劉整、參知政事のタチュと董文炳の順である。

荆湖行中書省の首腦部に新たに加わったのは左丞相バヤンと參知政事呂文煥である。バヤンはバアリン部族の出身で、曾祖父の代よりチンギス・カンに仕え、祖父の兄弟アラクは千戸長であるとともに左翼萬戸長ムカリに次ぐ副司令官(sutushan)であった。彼の父はフレグの西征とともにイランにいたった。バヤンはイランで育ち、フレグからクビライへの使節として、至元元年にはじめて東方にやってきた。クビライは彼の才を認めて拔擢し、政權の中樞に迎え入れた。⁽¹⁷⁾呂

文煥はいうまでもなく、もと襄陽の守將、孟珙からの南宋の荆湖軍閥の領袖である。

八月になって、淮西行中書省が行樞密院に戻されて荆湖行中書省の指揮下に入り、この後、荆湖行中書省は單に行中書省と稱されることになった。これは、史天澤が同格の行中書省が二つあると統制がつかず、敗戦の因となると進言したためであった。⁽¹⁸⁾この後、淮西軍團の長、左丞相カダアンは南宋遠征軍から外れた模様である。⁽¹⁹⁾これにより、荆湖行中書省の首腦、バヤン、史天澤、アジュが南宋遠征軍全體の長となる。なお、襄陽出發後まもなく、史天澤は病のため眞定に歸り没する。これら三人が全軍の長であったことはフレグ・ウルスでラシード・ウッディーンにより編纂された『集史』にも明記され、漢文史料には記されない情報も傳えられている。⁽²⁰⁾

「バヤンが」そこ(クビライ・カアンのもと)に着いて、カアンは三〇トマン(萬の意)のモンゴル軍と八〇トマンのヒタイ軍(漢軍)を整えられた。そして、ヒタイ人のアミールの一人で「チャガン」バルガスンの町出身であり、モンケ・カンの御世にイルになって(従って)いて、正しい心で仕えているサムカ(三哥)・バハードウル(史天澤)をヒタイ軍の長(ᠡᠭᠡ)に任命なされた。前述のバヤンと、ウリヤンカト部族出身でスベエテイ・バハードウルの孫のアミール、アジュをモンゴル軍の長(ᠡᠭᠡ)に任命なされた。「そして次のように」命じられた「全軍の長(muqaddam)は、サムカ・バハードウルである。なぜなら、彼(サムカ)の規律は厳しく、いつもその務めをよく果たしたからだ」と。彼らをナンキャス(南宋)の方へ派遣した。サムカは病のために途中で戻り、兩軍どちらの長(muqaddam)もバヤンとアジュになった。

史天澤は「副將」ではなく、漢軍の長であるとともに全軍の長であった。彼の死とともにモンゴル軍の長であったバヤンとアジュの二人が全軍の長となったのである。なお、史天澤の子孫には、彼に匹敵する地位に上ったものはいない。

(b) 五投下軍團

至元十一年にジャライル國王家の都元帥センウにより形成された南宋遠征軍である。この軍には固有の名稱がない。そこで麾下の「五投下の兵」にちなんで五投下軍團と呼びたい。軍團の形成について、『元史』卷一二八、相威傳には次のように述べる。⁽²¹⁾

至元十一年、世祖は相威に命じて速渾察^{スグンチャク}のもと統べたる弘吉剌^{コンギラ}などの五投下の兵を總べて宋を伐つに従わしむ。

彼が率いた「弘吉剌などの五投下の兵」とは何か。五投下とは、チンギス・カン西征のおり、中國方面の經略を委ねられた左翼萬戶長、ジャライル部族の長、ムカリ國王のもとに配された軍團に起源を持つ、ジャライル、コンギラト、イキレス、ウルウト、マングトの五つのモンゴル部族集團である。スグンチャク（速渾察）はムカリ以來、この家（ジャライル國王家）の當主たる國王の稱號を繼いだ人物で、センウはその子である。ムカリはこの五投下を中核とする麾下の軍を率いて中國經略を行った。彼から第四代スグンチャクにいたるまでのジャライル國王は、華北の軍の總司令官の地位にあった。モンケ・カアン以後の時期、その地位から離れていたらしく、センウが「速渾察のもと統べたる」五投下の兵を率いたと表現されているのは、そのためと考えられる。⁽²²⁾

南宋遠征の五投下軍團は、從來ほとんど注目されなかったが、その意味はきわめて大きいと考える。それは、次の理由からである。「五投下」集團は、チンギス・カン諸弟の東方三王家と並びクビライ政權樹立における二大勢力のひとつであった。⁽²³⁾ 東方三王家をはじめ、帝室諸王家の人物がこの南宋遠征に関わっていないことを考えれば、「五投下」筆頭のジャライル國王家の人物が長となって、ムカリ以來の「五投下」集團を率いて南宋遠征に向かったことの政治的意味はきわめて大きい。ちなみに、淮西軍團の長であったカダアンはウルウト郡王家當主であり、次に述べる淮東軍團の長ボロゴンも、マングト郡王家傍系ながら重要人物である。從來、襄陽からの荊湖軍團の動きのみが注目されてきたが、五投下の要

人を長とする東方からのこれら三軍團も無視できないのである。

五投下軍團の進軍路は、『元史』相威傳に「正陽より安豊を取り、廬〔州〕を略し、和〔州〕に克つ。司空山を攻め、野人原を平ぐ。安慶に道して江を渡りて東に下り、丞相伯顔の兵に潤州（鎮江）に會す。」とあり、淮西軍團のそれとはほぼ一致している⁽²⁵⁾。ただ、和州の勝利と司空山・野人原の戦鬪の記述には疑問がある。和州の降伏は安慶府より後である。また、文天祥に呼應した張德興が安慶西北の司空山を根據地にして元軍に抵抗し、それを淮西宣慰使の昂吉兒・史弼が討伐したのは、臨安陷落後の至元十四、五年のことだからである。この部分は順序・年次を誤って挿入されたか、または他人の記録が紛れ込んだ可能性⁽²⁶⁾がある。

(c) 淮東軍團

淮東軍團は一番遅く、至元十二年二月に形成された⁽²⁷⁾。長は中書右丞の都元帥ボロゴンである。彼はマングト部族の宗家たるマングト郡王家の傍系の出身である⁽²⁸⁾。彼の下に、以前河南行省で軍需を擔當していたアリー〔・ベク〕⁽²⁹⁾が左右副都元帥として付いた。淮東揚州をめざしたこの軍團は華北のマングト部族軍を中核とし、山東の舊李璫軍團の一部を併せ、さらに河南からの水軍から成るものであったと考えられる⁽³⁰⁾。

(2) 南宋遠征軍の再編

四軍團からなる南宋遠征軍は、會戦の勝利や據點都市獲得の後に四回にわたり再編を行った。それらを簡潔に述べていきたい。

第一回は至元十二年二月の宰相賈似道らの南宋軍を破った丁家洲の戦い（蕪湖の戦い）とそれに續く建康・鎮江の陷落の後に行われた。南宋の淮西制置使夏貴は丁家洲の敗戦後、翌年二月の投降まで積極的な軍事活動を見せなかったから、元

軍にとつての目標は首都の臨安と、戦意盛んな淮東制置使李庭芝の據る揚州となった。そこで荆湖軍團は二分され、アジュが揚州攻略にまわり、⁽³¹⁾ バヤンが臨安を目指すことになった。

第二回はバヤンの一時召還に伴うものである。五月になって、江南の夏の暑さの中での作戦を憂慮したクビライがバヤンを召還した。結局、作戦を續行することになり、バヤンは八月上都を發ち、今度は淮東方面から淮東都元帥府の軍とともに南下する。⁽³²⁾ バヤンの留守を建康で守るために荆湖軍團中から起用され、「權行中書省事」となったのがアラカン (Aragan、阿剌罕) である。彼はジャライル部族出身で、當時は蒙古上萬戸であつた。⁽³³⁾

第三回は焦山の戦後の分散南下の決定と臨安攻撃軍の形成である。

鎮江近邊に駐屯していた淮西と五投下の軍團は、七月に南宋の沿江制置使趙潛と樞密都承旨張世傑の軍を、やはり鎮江の北、長江の中州にある焦山で破る。揚州に包圍されて孤立する淮東の李庭芝の軍を除いて、南宋軍の本格的な抵抗はここに終息する。⁽³⁴⁾ それをうけて、クビライの命により遠征軍の再編が行われる。⁽³⁵⁾

湖北襄陽に残留し、さらにそこから南へ經略を續けていた、荆湖軍團のエリクカヤの動きが追認されて湖南經略が命じられる。また江西經略のための「行都元帥府」が形成され、これも荆湖軍團の、フウシン部族の蒙古萬戸スルドタイが「江西都元帥」として長となった。⁽³⁶⁾ 全軍の長がバヤンとアジュであることは變わりない。二人はこれまでの功績により昇進し、それぞれ中書右丞相、左丞相となった。淮西行樞密院は廢止され、アタカイと董文炳は行中書省の軍とともに臨安を目指すことになった。センウも彼らと行動を同じくした模様である。タチュは淮東左副都元帥としてボロゴンの淮東軍團に合流する。ちなみに、劉整は正月に既に没している(『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年正月戊寅)。

十月にバヤンが鎮江に至り、十一月に臨安攻略にむけての三軍編成が行われた。右軍の長はアラカン、中軍の長はバヤン、次はアタカイである。左軍の長はセンウ、次が董文炳であつた。⁽³⁷⁾

第四回は臨安陷落後における、バヤンの凱旋とセンウの揚州攻撃参加である。至元十三年正月に、南宋の謝太皇太后と

恭宗は玉璽と降表を臨安近郊に達した元軍にもたらして降伏した。臨安開城に伴う作業の後、三月にバヤンは南宋皇室らとともに臨安を出發し、五月に上都に凱旋する。臨安陥落後も、李庭芝らは揚州に立てこもりなおも抗戦を續けていた。包圍するアジュ、ボロゴンにセンウの軍が合流する（『元史』相威傳）。李庭芝は、臨安より逃れた益王昀に合流しようとして失敗し、揚州は七月に陥落する。⁽³⁸⁾

(3) 臨安・揚州陥落後の南宋遠征軍

(a) 軍團の長の歸還とシリギの反亂への出撃

至元十三年、首都の臨安と南宋の淮東軍團の據點揚州の陥落の前後から、荊湖軍團の長であり遠征軍全體の長であったバヤンとアジュ、五投下軍團の長センウ、淮東軍團の長ボロゴンらが相繼いで凱旋ないし北歸する（圖1では彼らにAの印を附す）。⁽³⁹⁾

これらのことは、首都たる臨安が陥落して、南宋皇室がクビライのもとに送られ、また最後まで抵抗した南宋の淮東軍團の據點、揚州を陥落させて、南宋遠征の大綱が終了したためと理解されてきた。しかし、首都や軍事據點を手にいれただけでは征服事業は終わらない。舊南宋領各地の鎮定や統治體制づくりが次の段階として控えている。彼らは統治體制が緒についたばかりのところで歸還し、センウを除いては二度と江南へ戻らなかった。それは、彼らが、同年中央アジア、イリ溪谷のアルマリクで勃發したシリギの亂とそれに關連した反亂の鎮壓のために出撃したためである。

シリギの反亂は、先帝モンケ・カアンの子であるシリギを中心に起こされた。反亂側により、アルマリクに駐屯してカイドゥらと對峙していたクビライの子北平王ノムガンとジャライル國王家の中書右丞相アントムが捕らえられ、それぞれモンケ・テムル（ジョチ家）、カイドゥのもとに引き渡された。これに呼應した反亂が各地で起こった。シリギらとカイド

ウとの連携はならず、内部分裂とクビライの敏速な對應により鎮壓された。しかし、元朝の中央アジア軍は崩壊し、逆にカイドウの勢力は擴大した。ノムガンとアントムが歸還できたのは、八年も後のことであった。⁽⁴⁰⁾

バヤンはカラコルム方面に出撃し、十四年七月オルホン川畔でシリギらと戦った。⁽⁴¹⁾ アジュは十四年正月、精銳一萬を率いクビライのもとに赴いた後、中央アジア前線に向かい、ビシュバリクに駐屯した。そこで至元十七年に病没したらしい。⁽⁴²⁾ ボロゴン⁽⁴²⁾は、コンギラト駙馬家の傍系のジルワダイの亂鎮壓にむかった。ジルワダイの亂鎮壓には、淮西軍團の長であったカダアンの子トゴン（脱歡）も参加している（『元史』卷二〇、朮赤台傳）。至元十四年三月癸丑にカダアンが「中書省の事を北京（大寧）に行した」（『元史』卷九）のもこの反亂鎮壓と關係があるかも知れない。

さて、問題はセンウである。彼が大都への凱旋後、至元十四年七月に行臺の御史大夫となるまでの行動には不明な點が多い。『元史』相威傳には次のように記す。

十三年夏、相威を驛召す。秋、入覲するに、大いに饗し、寶功されて金虎符・征西都元帥を授かり、仍^なお弓矢甲鞍・文錦表裏四・鈔萬貫を賜わり、從者の賞賜すること差有り。時に親王海都^{カイドウ}叛き、命ぜられて汪總帥の兵を率い西土に鎮す。

彼は至元十三年秋に「從者」とともにクビライの元に赴いた後、今度は「征西都元帥」となり、「汪總帥の兵」を率い、「西土」に駐屯したのである。ここでの「海都叛き」とは、時期からするとシリギがカイドウと連携しようとした事態、元朝軍の對カイドウ前線の動搖を指すとみるべきである。シリギの反亂またはそれに關連する反亂に對應して出撃したことは確かであろう。

センウはどこに出撃したのか、「西土」とはどこか。センウとともに出撃した人物の情報からも、その地は特定できない。彼の麾下にあったという「汪總帥」すなわち鞏昌オングト族の長たる汪惟正は、安西王マンガラのシリギの反亂への出撃に同行した後、至元十四年冬には六盤山のトゥクルク（土魯）の反亂の鎮定に向かうため歸還する。汪惟正に關わる

史料中には、前線のどこに向かったか、またセンウの麾下に入ったことは記されていない⁽⁴³⁾。しかし、相威傳に「汪總帥の兵」を率いたと記す以上、マンガラの北征の際に、汪惟正がセンウの麾下に入っていた可能性が高いと考えられる。

センウが主將、アジュが副將としてビシュバリクに進駐したとする考えもある⁽⁴⁴⁾。兩者ともに揚州攻略に従い、クビライへの入觀の時期も一致する。第三章に述べるようにセンウの地位が高いことからすれば、アジュがビシュバリクに駐屯した際に副將であった可能性はある。しかしながら、それを直接明言する史料は見えないのである。なお、この時期センウの麾下に入った益都の韓政や、濟南の漢人軍閥出身の張元節に關わる史料にも、センウの出撃した具體的な地名は記されていない⁽⁴⁵⁾。

(b) 江南殘留の將軍たちによる行省の形成

以上のように、南宋遠征軍の總司令官バヤンをはじめ各軍團の長たちは、シリギの反亂および關連反亂に出撃していった。では江南に殘留した、軍團の次以下の將軍たちはどう行動したのだろうか。

バヤンらの歸還後、軍團の次以下の將軍たちにより、各地で南宋殘存勢力の平定が進められていった。彼らは、進軍した南宋の各路名（略記されることが多い）を附した宣慰使の肩書きを帶びるようになり、その内の上位の將軍は中書省の官も併せて帶びた（圖1では、彼らにBの印を附す）。その最初は至元十三年十二月庚寅の五道宣慰使の設置である（『元史』卷九、世祖本紀）。經略の進行にともない、四川を除く舊南宋十一路の宣慰使がそれぞれ複數存在することとなった。そして、これらが組み合わされて江南の四行省が成立していくのである。

中書右丞エリクカヤは荆湖北路の鄂州から、荆湖南路の潭州（長沙）に進み、至元十三年正月元旦に陷落させる。ここですでにいったんクビライの元に赴き、廣南西路の經略を命じられ、平章政事に昇進する。潭州から湘江に沿って南下し、廣南西路を平定した⁽⁴⁶⁾。一方、臨安遠征軍からは參知政事アウルクチが荆湖北路宣慰使にまわる⁽⁴⁷⁾。荆湖軍團起源のエリクカヤと

アウルクチの系統が平定した荆湖南北路、廣南西路で湖廣行省が形成されたのである。アウルクチはジャイル部族で、「四萬戸總管」として襄陽攻撃軍に参加していた。⁽⁴⁸⁾

江西行省の母胎となったのは、先述の至元十二年七月の南宋遠征軍の再編で形成されたスルドタイを長とし、江西經略を命じられた「行都元帥府」である。山東系の軍を率い、淮西から淮東軍團へ移動した都元帥タチュが、揚州陥落後、これに合流する。スルドタイが十月に没した後、タチュが江西都元帥として、この行都元帥府の長となり、江西宣慰使の肩書きも帯びる。經略は順調に進み、翌至元十四年正月には、廣東に達した。そこで七月には、南宋の江南西路、廣南東路を領域とする江西行省が隆興に置かれる。中書右丞の官を帯びて、その長となったのはタチュであった。三月の歸服後までもない泉州のムスリム商人の領袖、蒲壽庚が參知政事として加わっていることが注目される。

江淮行省は、南宋の淮南東西路、江南東路、兩浙東西路を平定した少なくとも四つの系統が合同して形成されたものである。兩浙西路は淮西軍團の中書平章政事アタカイが淮西宣慰使として、⁽⁴⁹⁾兩浙東路は山東系の淮西軍團の萬戸カイドゥらが浙東宣慰使として平定を進めた。⁽⁵⁰⁾荆湖軍團の中書左丞アラカンが江東道宣慰使、淮東宣慰使を歴任して、江南東路、淮南東路の平定を行った。⁽⁵¹⁾淮南西路は、至元十三年二月、南宋の淮西制置使夏貴が降った後、淮西宣慰使の萬戸昂吉兒らが南宋殘存勢力を追討した。⁽⁵²⁾これら平定にたずさわった將軍の内、最高位にあったのは平章政事のアタカイとアリー「・ベク」であり、それに次ぐのが左丞のアラカンであった。ちなみにアリーは至元十七年に失脚して殺される。⁽⁵³⁾

江西行省のタチュの麾下にあったソド（唆都）は福建路宣慰使として福建路の南宋殘存勢力の平定を行った。臨安の接收を擔當した萬戸マングタイ（蒙古帶、忙兀台）がこれに加わった。⁽⁵⁴⁾至元十五年三月になって、江西行省の蒲壽庚を加え福建行省が形成され、⁽⁵⁵⁾海上通商の振興がクビライより命じられる。福建行省の首腦は三名とも八月、十月に中書左丞となったため、誰が長かは分からない。⁽⁵⁶⁾

(c) センウの江南歸還と行臺の設立

シリギの反亂に對して出撃していった南宋遠征軍の軍團の長のうち、センウのみが江南に歸還し、攻略を擔當した揚州に行臺を設立する。

『元史』卷九、世祖本紀、至元十四年七月丙午の條には、行臺とそれに屬する八道提刑按察司設置の事實のみを記す。

行御史臺を揚州に置き、都元帥相威を以て御史大夫と爲す。八道提刑按察司を置く。

相威傳もクビライのもとに召されて行臺の御史大夫を拜命した際、監察御史の人選を嚴格にするようセンウが提言したことを述べるのみで、前線からの歸還などに關わる事情は知ることができない。⁽⁵⁷⁾

十四年七月といえ、モンゴリア制壓をねらうシリギ軍とバヤンがカラコルム北方で戦うなど、クビライ政權にとって重大な危機をまだ脱していない時期である。一方、江南では軍團の長がセンウ以外不在のまま、前節に述べたように軍團の次以下の將軍らによる各地の平定が開始されたばかりのころである。この時期、センウを長たる御史大夫として設立された行臺とはどのようなものであり、何をしたのでろうか。それを次章で検討したい。

第二章 行臺の活動とその構造

本章では、センウを御史大夫として揚州に設立された行臺とは、どのようなもので、何をしたのかを検討する。

行臺が何をしたのかを知る手がかりの第一は『南臺備要』に載る一文書である。『南臺備要』は元末至正年間に、行臺設立以來、行臺に下された公文書などを、行臺自身が集成・編纂した書である。この書の現存部分冒頭の文書が、クビライがセンウを行臺の長に任命した「硬譯體」による聖旨(モンゴル語の「ジャリク」(Jaliruk)、「すなわち「おおせ」の漢譯語)である。本來はモンゴル語で記されていたものを、そのまま直譯したものであり、かなり難解であるが、近年、蓄積され

つつあるモンゴル命令文研究の成果をふまえて、以下に現代語に譯す。⁽⁵⁸⁾

「行御史臺を設立して、センウに命じて御史大夫とする制」…至元十四年、つつしんで奉じた聖旨にて、行中書省、宣慰司、都元帥府、招討司、管軍萬戶府、諸々の管軍官、隨路のダルガチ、管民官、管匠官、打捕・鷹房、まさに公務を管轄すべき様々な種類の人々に諭し、遍く諭した聖旨。天はかたじけなくも南宋を得さしめたぞ。「任務を」任せて行かせた大小の官吏は、仕事をその時に、人民たちから決まりにない差發をとりたて、非道に騒ぎ亂し、およそ公務があれば情實をうかがっている。今、大小の公務に任命した官人たちに對して、誰であれ、いずれの場合であらうとも現地調査を行え。センウを行御史臺の頭として任命するぞ。これを欽め。⁽⁵⁹⁾

この聖旨を分析すると、一、行中書省以下の江南のすべての官に向けて宛てられている。二、南宋朝廷の降伏の後、江南に乗り込んだ官吏たちが不正を行い、それによる混亂が起こっていることが認識されている。三、これらの不正に對しては、何人でも、またいかなる場合でも現地調査が命じられている。四、センウを行御史臺の長に任命している。この文書から、センウは、江南の行中書省以下のすべての官吏を對象として、その不正を糾弾する監察活動を行うことを命じられていることが分かる。

監察活動を實行するため、行臺は設立當初から、その官制が整い、官吏もそろい、監察すべき事項も規定されていた。これを當然のこととして看過してはならない。というのは、モンゴル帝國から元朝初期においては、中國方面で、いわゆる中國的な名稱の官廳、官名が史料に表れても、それがそのまま中國的な官制の存在を示していない場合もあるためである。⁽⁵⁹⁾

行臺の官制は、『永樂大典』卷二六〇七、臺、御史臺二所收の「經世大典」や經世大典に基づいたと見られる『元史』卷八六、百官志二により知ることができる。御史大夫以下の行臺官については、『至正金陵新志』卷六、官守志、題名により、設立から至正三年（二三四三）に至るまでの、ほとんど全ての人事が記されている。⁽⁶⁰⁾ これらによれば、設立當初の

行臺官は、御史大夫センウ、御史中丞は焦友直・耶律老哥の二名、侍御史の劉琮、治書侍御史の田滋、都事は高源・尉昞の二名、照磨承發司管勾兼獄丞の趙英、架閣庫管勾の姚炯、監察御史は劉寅、商琥、趙文昌、栢德思孝、王祚、馬藻、李璋、陳特立、李敏、孫弼の十名から成っていた。

行臺設立の際に「行御史臺を立つる條畫」⁽⁶¹⁾が發布され、監察に関わる條畫三十一條が列擧されている。同時に「江南の提刑按察司を立つる條畫」も發布され、こちらは十三條ある。これらの監察すべき項目は多岐にわたるため、詳しい分析は『元典章』などに載る實例との比較とともに今後に期さねばならない。ただ、ここで一つだけ注意しておきたいのは「行御史臺を立つる條畫」の第一條である。行臺が直接に不正を彈劾し、文書を調査すべき對象は行中書省と宣慰司であり、それ以下の官廳については提刑按察司の擔當であることが述べられている。これにより行臺と按察司兩者の活動範圍が判明する。

實際、『元史』相威傳には、浙西宣慰使昔里伯が浙東の反亂鎮壓の際、良民を捕虜にした事件（至元十五年）や、湖廣行省のエリクカヤらが降民を奴隸にした事件（至元十七、十九年）⁽⁶²⁾を摘發したことが見え、行省官と宣慰使が行臺の監察對象となっていることが確認される。また、至元十六年にセンウがクビライのもとに赴いた際には中書平章政事アフマドの取り調べを擔當した。この背景には、この時期の財政を取りしきったアフマドが、江西榷茶運司ほかの官を設立して江南の財務に関わった際の權益紛争があるだろう。⁽⁶³⁾

センウは、官の不正の摘發のみならず、江南の政治の大綱に関わる發言もしている。御史大夫に任命された前後に、行省の合併、冗官の削減、鎮守軍の統制ほか十五項目の提言をクビライになしたと言う。至元十八年の第二次日本遠征の失敗に對してクビライは、その遠征軍の長であった行省左丞相アタカイに再度の遠征を命じた。それに對し、センウは十分な準備の後、日本の油斷について出撃すべきことを提言している。⁽⁶⁴⁾ これらも廣義の監察活動と言えようか。

以上の監察活動は、「御史臺を行する」ものである以上、當然豫想される。ところが、行臺が軍事活動を行っていたこ

とが分かる記録があり、注目すべきである。それは、至元二十一年のセンウの死の翌年に、一時行臺の存廢が課題となった時のものである。正月に、財政を擔當する中書右丞盧世榮の主導により第二代行臺御史大夫のボロゴンを罷免するとともに、杭州に移っていた行臺を廢止し、行省の軍事力を分離して行樞密院を設立するなどの大改制が行われようとした。行臺廢止の動きに對して御史臺は反發した。この件については行臺を存續し、江州に移動させることで決着した。⁽⁶⁵⁾『南臺備要』の硬譯體で記された關連記事を引用する。⁽⁶⁶⁾

「行臺を江州に移す」…至元二十二年三月二十五日に、大口の北の虎皮察只兒で、御史臺の官が、アントム丞相・アビシユカ平章・盧〔世榮〕右丞・サダミシユ參政・ボルミシユカヤ參政らが奏して行御史臺を廢止した事について、われら〔御史臺の官〕が題説した〔ところ〕、聖旨にて「大都に行つて中書省の官人たちに問え」と言った。聖旨をうけたまわつて、中書省にどうして廢止したのかを問うた。アントム丞相が、奏説した御史臺の役人たちに言うには「江南で盜賊が何度も發生し、この行臺が鎮壓した。私も我らの同僚たちに「こう」言った。『廢止したらよろしくないようだ。』」聖旨にて「おまえたちの言葉に従つて、行御史臺を江州に移して立てよ。」これを欽め。⁽⁶⁷⁾

ここでの中書右丞相アントムの發言はきわめて重大である。彼は行臺を廢止すべきでない理由として、何度も發生した江南の盜賊＝反亂、その鎮壓の功績を挙げ、この發言によつて、クビライは行臺の存續を決定したのである。これにより、行臺が江南の諸反亂の鎮壓にたずさつたのは確かと考えられる。しかし、「行御史臺を立つる條畫」三十一條中には、管軍官への監察に關わる五條はあるものの、反亂鎮壓という軍事活動に關わるものはない。⁽⁶⁷⁾浙西宣慰使昔里伯が浙東の反亂鎮壓の際、良民を捕虜にした事件のように、行臺が江南反亂の鎮壓を行った官に對し監察を行ったことはあつた。しかし、それでは、江南の反亂を行臺が鎮壓した、というアントムの發言はありえない。ということは、行臺が自らの軍か、行省・宣慰使の軍を率いて戦つたと考えられるのである。⁽⁶⁸⁾

ところが、先に挙げた行臺官制には軍事に關わる官職はない。設立からセンウの死に至るまでの、御史中丞以下の行臺

官の履歷を追つてみても、判明する限り反亂鎮壓の活動を記すものではなく、また行臺設立以前からセンウの屬下にいた者もない。行臺設立は、江南各地の平定が進み始めた時期のことである。そのような不安定な段階で、軍事力なしに監察官のみが乗り込み、監察を行い得る情勢ではなかった。これらからすると、都元帥センウが、彼自身に屬する軍、またはそれに加えて行省・宣慰使の軍によって軍事活動をおこなったと見るべきである。センウ自身に屬する軍といえ、彼が長であつた五投下軍團しか有り得ない。もちろん、ジャライル以下の五投下の勢力がすべて江南に移るはずはなくその一部分を中核とするものであらうが、南宋遠征軍の一つであつた五投下軍團は、シリギの反亂鎮壓に出撃した後、センウとともに江南に戻つてきたと考えられるのである。⁽⁶⁹⁾

注意すべきことは、アントムが軍事活動を行臺の活動であると認識していることである。すなわち、行臺は「御史臺」の名の通り監察活動をおこなう中國的官廳の部分と、官制の表面には出ないものの、その軍事活動が重視される五投下軍團の部分の二つから成つていたのである。この二つの部分をつなぐ要となるのが、御史大夫として監察活動を行い、かつ五投下軍團を率いる都元帥センウその人なのである。このような行臺の二重構造は、元朝というものの性格を特徴づけるものと考えられる。モンゴルはあくまで軍事政權であるうえで、その一方、中國全土を領した以上、中華王朝をも標榜せざるを得ないのである。ちなみに前章で述べた如く、江南の行省にしても、行臺と同じく南宋遠征軍が母胎となり、その軍の將軍が行省の高官となつて形成されたものである。行省も單なる行政官廳ではなく、その起源となつた將軍以下に屬する軍事力をもち續けていたことは言うまでもない。至元二十二年（一二八五）から成宗テムルの元貞元年（一二九五）の間存在した江南の三行樞密院は、行省の軍事力が分離して形成されたものであつた。⁽⁷⁰⁾ 江南のみならず、元朝中央の中書省、樞密院、御史臺も、このような構造をもつていたかどうかを検討する價值があろう。

以上、本章の検討の結果、行臺は二つの部分から成る總體であることを結論したい。それは、一つは御史大夫センウを長として江南の行省以下のすべての官（行省・宣慰司以外は屬下の提刑按察司を通して）を對象とする監察活動を行う中華王

朝の官廳の部分であり、もう一つは都元帥たるセンウに直屬し、反亂鎮壓などの軍事活動を行う五投下軍團の部分である。その二つが、兩者の長たるセンウという個人により結び付けられているものであった。

第三章 江南支配における行臺の重要性

元朝の江南統治において行臺はなぜ重要なのか。本章では、重要と考える理由を以下二つ挙げて、それについて説明を加えていきたい。

なによりもまず第一の理由は、江南全域を管轄し得る機關は、江南において行臺しかないということである。第二章で述べたように、行臺は江南の行省以下の全ての官を對象として、行省と宣慰司は行臺が直接に、それ以下の官については屬下の提刑按察司を通じて監察を行うことを命じられていた。行臺は監察活動を通して、江南全體の統治に關與し得たと考えられる。實際にセンウは、行省・宣慰司官の不正の摘發を行うと同時に、江南統治の大綱に對する發言をおこない、それが實行されている例が見られる。⁽⁷¹⁾

行省が江南の各地域のみのものであるのに對し、行臺は江南全域を管轄するという認識を行臺自身が強く持っていた。至元二十二年、第二章で言及したように行臺の存廢が問題となった。當時、行臺は江浙行省とともに杭州にあった。浙西道提刑按察使であつた千奴は、次のように上言した(『元史』卷二三四、和尚傳附千奴傳)。

行省は江浙を專控すれば、杭〔州〕に在るを宜と爲す。行臺は江南を總鎮すれば、宜しく杭〔州〕に偏在するべからず。且つ兩大府並び立ち、勢偏まれば則ち事窒ぎ、情通すれば則ち威褻る。蓋そ行臺を要便の所に移さざらんや。江南全域を管轄する行臺は、杭州のような江南全體から見れば偏つた場所に、江浙行省とともにあるべきでなく、より要地にあるべきであると考えているのである。⁽⁷²⁾

行臺が江南統治において重要と考える理由の第二は、行臺御史大夫センウの地位が、行省を形成していった將軍たちの

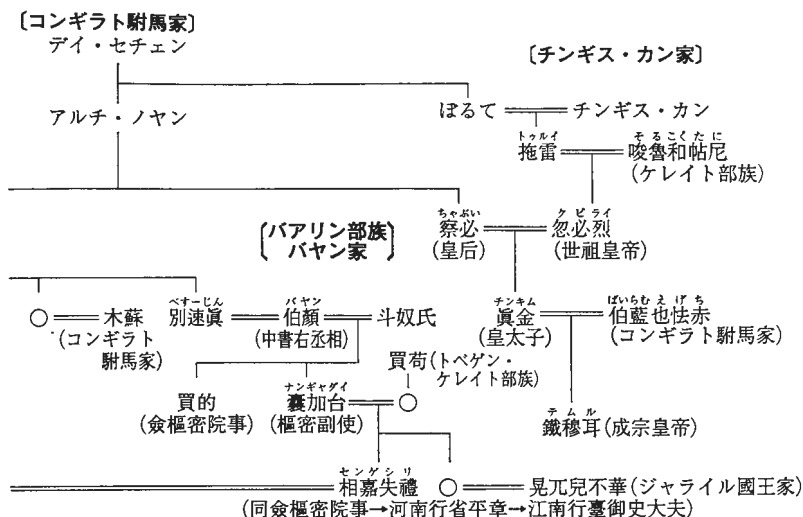
それに比して卓越していることである。

ジャライル國王家のセンウのクビライ政權における地位はきわめて高く、その中樞部の一員を成すと考えられる。それを端的に示すのが「圖2 ジャライル國王家の姻戚關係」に示されるセンウの家系上の位置である。

この系圖を一覽すると、まずジャライル國王家が、チンギス・カン家の姻族として名高いコンギラト駙馬家をなかだちにしてチンギス・カン家とつながっていることが分かる。コンギラト駙馬家のアルチ・ノヤンの二人の娘のうち、チャプイはクビライ・カアンの、テムルンはジャライル國王家のバートルに嫁いでいる。クビライと、その卽位に盡力したバートルは義兄弟であつたのである。⁽⁷³⁾バートルの系統は、クビライとの姻戚關係と政權樹立の際の大功により、ジャライル國王家内部のみならず元朝における最高の家系のひとつとなる。バートルはクビライ政權成立後まもなく没したが、その子アントムは中書右丞相とクビライの四ケシクの長の一人として政權の中樞にあつた。センウは、このアントムのいとこにあたる。センウの父スグンチャクと、兄クルムシは當主たる「國王」を襲封したから、センウの家系もバートルの家系に次ぐものと考えられる。しかも、センウが行臺御史大夫であつた時期は、ちょうどアントムがシリギの反亂により、敵對するカイドゥの下に送られて不在の時期に一致するから、センウの政權内での存在はより大きいものとなつていたに違いない。⁽⁷⁴⁾至元二十一年三月にアントムが歸還したのと入れ違うように、四月にセンウが没した。廢止が課題となつた行臺をアントムが存續しようとしたのは、ジャライル國王家の人物が長であつた官廳を存續させようという意圖があつたのかもしれない。⁽⁷⁵⁾

ちなみに南宋遠征軍の總司令官であつたバヤンが、彼以降、ジャライル國王家と姻戚關係になつてゐることも注目される。バヤンが拔擢されて政權中樞の一員となつたことを示すものである。

江南に残留し行省を形成してゐた將軍たちには、以上のような政權内での地位の高さを示すものはない。第一章(3)(b)で述べた彼らの名を確認しておこう。⁽⁷⁶⁾(括弧内は部族等を示す)。



平忠憲王碑」「丞相淮安忠武王碑」（『國朝文類』卷二四），黃潛「中書右丞相——追封鄆王諡文忠神道碑」（『金華黃先生文集』卷二四）より作成。

國王家の姻戚關係

湖廣…エリクカヤ（ウイグル）・※アウルクチ（ジャライル）

江西…※スルドタイ（フウシン）・※タチュ（タング

ト）

江淮…アタカイ（スルドス）・※アラカン（ジャライル）

福建…ソド（ジャライル）・マングタイ（タタル）

※印を附した者は、かつて筆者が「華北のモンゴル軍團長」とした家系の出身である。彼らには有力部族長の家系の出身者はいない。たとえば、同じジャライル部族出身でも、センウの國王家とアウルクチ、アラカンの家系には大きな格差があり、モンゴル支配層も二層となっていたと考えられる。それは、本據地の位置や所領の有無、軍事行動に表れている。ジャライル國王家は、モンゴリアの上都周邊を根據地とし、華北の東平に三萬九千餘り、江南の江西韶州に四萬一千餘りの所領を有している。それに對し、アウルクチは洛陽南郊の龍門に、アラカンは曹州に本據を持ち、華北・江南とも所領はほとんどない。(79) センウの軍事行動が南方は江南の諸反亂鎮壓までであったのに對

當初の行臺御史大夫の官品は從二品で、中書左・右丞相從一品、平章政事從一品、左・右丞正二品に比べて低い。またセンウ自身は文武の位階を帶びていない。しかし彼の地位は、先に見たように、官階による序列が不必要なほど高いのである。

行臺設立時、クビライが置かれていた状況を考えると、行臺の江南支配における重要性はより際だつ。シリギの反亂の鎮壓に、南宋遠征軍の長たちを出撃させたが歸趣はまだ見えず、江南の平定も未完で混亂が生じている。政權中樞のセンウを召還して五投下の軍とともに江南に乗り込ませ、行省以下すべての官を對象とする監察を行わせた。行臺の成立は、クビライ政權の江南支配において、きわめて大きな政治的意味を有すると言える。行臺は設立當時、事實上江南支配の頂點に位置する機關であつたと考えるのである。

むすびにかえて

以上、三章にわたり論じたことは以下のようにまとめられよう。

襄陽陷落後の南宋遠征軍は四軍團から成り、センウは五投下軍團の長であつた。彼は淮西軍團とともに南下し、臨安・揚州の攻略に参加した。他の軍團の長と同じく、センウはシリギの反亂鎮壓に出撃する。江南に残留した軍團の次以下の將軍たちによって各地が平定され、行省が形成されていく。シリギの反亂鎮壓に出撃した軍團の長たちのなかで、センウ一人が江南に戻り、行臺を設立する（第一章）。行臺は江南の行省以下の官すべてを對象とする監察活動を行う中國的官廳と反亂鎮壓という軍事活動を行う五投下軍團とから成り、兩者は御史大夫である都元帥センウにより統合される（第二章）。江南全域を管轄する機關は、江南では行臺のみである。且つ行省を形成していった將軍に比べ、政權中樞の一員たるセンウの地位は卓越する。設立された時期を考えあわせると、行臺は江南支配の頂點に位置する機關と言える（第三章）。

最後に今後の研究への展望をいくつか記しておきたい。一、センウの死後、行臺はどうなるのか。至元二十一年のセン

ウの死後、五投下の一つマングト部族で淮東軍團の長であったボロゴンが行臺御史大夫となるが、このころから江南支配體制に大きな改變が行われたらしい。本稿でも言及したように財務を握る盧世榮により行臺の廢止が一時議論される。二十八年にはクビライの庶子、鎮南王トゴンが揚州に鎮して江南に君臨することになる。行臺は元末まで存続するが、その活動や地位はどうなるのか。二、行臺と行省の關係はどうなったか。設立當初から文書の検査などをめぐり、行省との關係は緊張したものであった。監察と行政の對立といった單純な圖式ではなく、その眞の政治的意味を知るには、各行省の形成や性格について、より研究を深める必要がある。特に對立の激しかった江淮（江浙）行省は、江南の富の集中する地域であり、中央政界での權益をめぐる對立が豫想される。三、江南支配における「漢人」「南人」。彼らをはじめ諸民族・集團が支配體制にどう位置づけられたのか。蒲壽庚らムスリム商人の動向にも注意すべきである。多くの民族・言語・宗教の並存する江南社會と、そこにおける異なる文化の交流の實體を知るためには、この課題は重要なものとなる。四、行臺の監察活動の實際。『南臺備要』『元典章』などに收録される文書の分析により、監察機關による實情把握・政策決定とその傳達を知ることができる。巨大・複雑な國家を運営するシステムの重要な一機能が解明されるであろう。五、明清の總督巡撫制との比較。複数の省を管轄し、監察と軍事を司るといえば、督撫が連想される。行臺との相違點。政權の性格や時代・社會の差はどう反映しているのか。

以上の問題の解明にむけて牛歩を續けたい。そして、さらに、こうした基礎研究をつみかさねた上で、できれば近い將來、モンゴル帝國を中心とする十三・十四世紀のユーラシアにおいて、江南社會がになっていた歴史上の意味（おそらく、それは世界的な意味をもつ）をも解明したいと考える。その時、われわれの歴史理解はより豊かなものになるだろう。

註

- (1) 前田直典「元朝行省の成立過程」(『史學雜誌』五六一六、一九四五年。『元朝史の研究』一九七三年、所收)五 元朝行省制の確立、2 フビライ朝の軍前行省と南部諸行省の成立。

(2) 彼の名の正しい読み方はまだ分からない。「相」字が「相哥失禮 (Sengeshiri)」のように seng の音を表す例、「威」字が「旭烈威 (Hilegi)」のように gi の音を表す例があることから、假にセンウ (*Seng'u) と讀んじょおきたい。

(3) 郝時遠「元代監察制度概述」(『元史論叢』第三輯、一九八六年)、丹羽友三郎『中國元代の監察官制』(高文堂、一九九四年)第三章 元代の行御史臺。

(4) 李天鳴『宋元戰史一〜四』(臺北、食貨出版社、一九八八年)、陳世松・匡裕徹・朱清澤・李鵬貴『宋元戰爭史』(成都、四川省社會科學院出版社、一九八八年)、胡昭曦・鄭重華『宋蒙(元)關係史』(成都、四川大學出版社、一九九二年)。

(5) 『南臺備考』「立行臺名字」大德元年十月初三日(『永樂大典』卷二六一〇、六葉裏)。これ以後、「南臺」「南行臺」と略稱されることも多い。

(6) 至元十一年正月に南宋遠征を正式決定した際に、荊湖軍團の首腦の一人アジエ(Aji, 阿朮)とエリクカヤがモンゴルの「南征」では必ず三軍體制をとっており、今回の南宋遠征でも三軍體制をとるには、十萬の兵員増強が必要な旨の發言をしている(『元史』卷八、世祖本紀、至元十一年正月丙午)。過去の「南征」での三軍編成の例としてはオゴデイ時代の汴梁に残る金王朝征服や、モンケ時代の雲南遠征や南宋遠征が挙げられる。これらについては、杉山正明「クビライ政權と東方三王家——鄂州の役前後再論——」(『東方學報』京都五四、一九八二年)二六五〜二六六頁、および拙稿「クビライ

イ政權の成立とスベエテイ家」(『東洋史研究』四八一)一二七〜一二八頁参照。ひとつ疑念が残るとすれば、『元史』卷一二七、伯顔傳(至元十一年九月甲戌朔、丙戌)に記されるように荊湖軍團が中軍であることからすると、残りの二方面三軍團はいずれも東方からの進軍となり、西方右翼軍に相當するものがないことである。従来の南征が諸子諸弟王家も参加するものであったのに對し、王家の参加しない、この南宋遠征は、變則的であつたからか。四川からの汪惟正の軍が右翼軍に當たるのかも知れないが、實現しなかつた(『元史』卷一五五、汪世顯傳附惟正傳参照)。

(7) この河南行省および軍前行省の性格については、前掲前田「元朝行省の成立過程」一七八〜一七九頁参照。軍前行省のもとに蒙古都元帥・漢軍都元帥・四萬戶・河南統軍司・沿邊の監軍萬戶麾下の部隊がいたことは次の史料から分かる。『經世大典』佚文「站赤二」(『永樂大典』卷一九四一七、三葉)至元六年十二月の條および『元史』卷七、世祖本紀、至元九年三月甲戌の條。

(8) 前掲拙稿「クビライ政權の成立とスベエテイ家」四 アジエの登場、同「元代華北のモンゴル軍團長の家系」(『史林』七五・三、一九九二年)A・ウリヤンカン部族スベエテイ家、参照。

(9) 『元史』卷七、世祖本紀、至元九年三月甲戌、同卷一二八、阿里海牙傳。『國朝文類』卷五九、姚燧「湖廣行省左丞相神道碑」。

(10) 衣川強「劉整の反亂」(『劉子健博士頌壽紀念宋史研究論

集』一九八九年）参照。

- (11) 前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」四八～五二頁参照。

- (12) 『國朝文類』卷七〇、「曩城董氏家傳」、「元史」卷一五六、董文炳傳。

- (13) 杉山正明「ふたつのチャガタイ家」(『明清時代の政治と社會』京都大學人文科學研究所、一九八三年)六七七～六七八頁。

- (14) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十年九月壬午、丁酉。

- (15) 一二七一年のチャガタイ家當主のバラクの横死に始まるもの。當時の情勢については、前掲杉山「ふたつのチャガタイ家」六五四～六五六頁、同『大モンゴルの世界』(角川書店、一九九二年)二二二～二二六、二三八～二三九頁参照。

- (16) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十一年正月丙午、同卷一二八、阿里海牙傳。『國朝文類』卷五九、姚燧「湖廣行省左丞相神道碑」では、エリクカヤがアントムかバヤンを起用するよう獻策したことになっている。

- (17) Rashid al-Din, *Jami' al-Tawarikh*, mss. Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kutüphanesi, Revan 1518. (JL-JT) 130a. 『國朝文類』卷二四、元明善「丞相淮安忠武王碑」。本田實信「チンギス・ハンの千戸」(『モンゴル時代史研究』東京大學出版會、一九九一年)二〇頁、志茂領敏「モンゴル帝國史研究序説」(東京大學出版會、一九九五年)三五九～三六〇頁。sükusunの意味については Doerfler G., *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*,

BAND I, p. 343. 参照。

- (18) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十一年八月丁未・同卷一二七、伯顔傳。

- (19) カダアンは、南宋遠征の記事中には見えなくなる。彼のこの後の動向として知られるのは至元十四年三月癸丑到北京行省平章政事となったことのみである(『元史』卷九)。

- (20) JT. 210a.

- (21) センウにはこの列傳のほかは、神道碑、墓誌銘などの傳記史料はない。

- (22) 『元史』卷一一九、木華黎傳、附速渾察傳・同卷一二一、博羅歡傳。『國朝文類』卷五九、姚燧「平章政事忙兀公神道碑」。前掲前田「元朝行省の成立過程」一五一、一六〇頁。

- 前掲杉山「大モンゴルの世界」一五四～一五八頁参照。

- (23) 前掲杉山「クビライ政權と東方三王家」二六八～二六九、二九六～三〇五頁参照。

- (24) チンギス・カン以來、モンゴル帝國の大規模な遠征では諸王家の重要人物を總指令官とし、さらに諸王が率いる部隊が参加するのが常であった。クビライ政權樹立における東方三王家の支援の重要性、さらに戰役参加が領土分配の前提となることを考えれば、この點は特筆すべきことと言ってよい。

- (25) アカタイ・正陽↓池州↓建康(『元史』卷一二九、阿塔海傳)、タチュ・盧・揚の聞↓池州↓太平↓建康(『元史』卷一三五、塔出傳)、董文炳・正陽↓安慶(『國朝文類』卷七〇、元明善「曩城董氏家傳」)。

- (26) 安慶、和州の降伏はそれぞれ至元十二年二月癸卯、戊辰で

ある(『元史』卷八、世祖本紀)。司空山での攻防については『宋史』卷四七、瀛國公本紀、至元十四年五月。『元史』卷一三二、昂吉兒傳・同卷一六二、史弼傳参照。

(27) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年二月甲辰。

(28) 前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」E・マングト部族ボロゴン家。

(29) 『元史』卷七、世祖本紀、至元八年正月己卯。

(30) 軍團の形成とともにアリーと、益都に残るサルギスに麾下の「蒙古・漢軍」を南流黄河畔の邳州に集結させており、また河南の戦船を宿州・蘄縣の駐屯兵に率いさせて合流させている。さらに、六月には「山東經略司」の軍を併合している。前掲「平章政事忙兀公神道碑」、『元史』卷八、至元十二年二月甲辰、六月戊辰。

(31) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年三月辛丑(三十日)。

(32) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年五月丁亥、同卷一二七、伯顔傳。前掲、元明善「丞相淮安忠武王碑」。

(33) 「上萬戸」は萬戸中の上位ということを示したのか。彼については、前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」B・ジャイル部族ブジエク家、参照。

(34) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年七月庚午朔辛未。

(35) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年七月癸未、甲午。

(36) 彼については、松田孝一「河南淮北蒙古軍都萬戸府考」(『東洋學報』六八一・三・四、一九八七年)、同「On the Hōnan Mongol Army, *The Memoirs of the Toyo Bunko*, 50, 1992, および前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」F・フウシン部族タガチャル家、参照。

系」F・フウシン部族タガチャル家、参照。

(37) 『元史』卷八、世祖本紀、至元十二年十一月乙亥、同卷一二七、伯顔傳、同卷一二八、相威傳ほか。『宋史』卷四七、瀛國公本紀、德祐元年十月壬戌。前掲、元明善「丞相淮安忠武王碑」。

(38) 『元史』卷九、至元十三年六月壬辰、七月乙巳、乙卯。『宋史』卷四二一、李庭芝傳。

(39) 先にも述べたようにバヤンは至元十三年五月乙未朔に南宋の恭宗を伴い、上都に凱旋した。アジュが大都のクビライの元に兩淮の平定を報告したのは九月辛酉のことであった(『元史』卷九、世祖本紀・卷一二八、阿朮傳)。センウも秋にはクビライのもとに赴いている(『元史』卷一二八、相威傳)。ボロゴンは既に四、五月の交に病のため北歸し、その後の揚州陥落には関わらなかった(『元史』卷一五六、董文炳傳附董士元傳および同卷九、世祖本紀、至元十三年五月丁未以下)。

(40) シリギの反亂については、以下の三論著を参照。前掲杉山「ふたつのチャガタイ家」六六二～六六五頁。同「大モンゴルの世界」二一六～二一九頁。村岡倫「シリギの亂」元初モンゴリアの争亂」(『東洋史苑』二四・二五合併號、一九八五年)。

(41) 『元史』卷九、世祖本紀、至元十四年七月癸卯・同卷一二七、伯顔傳。

(42) 前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」三八頁注(8)、参照。

- (43) この時期、「汪總帥」と表現されうるのは、汪惟正と叔父の汪良臣であるが、良臣は四川の對宋前線を離れていない。惟正はマンガラの出撃に際し、重慶攻撃から呼び寄せられ、本據鞏昌を経て前線に向かった。『元史』巻九、世祖本紀、至元十四年三月癸丑・卷一五五、汪惟正傳・卷一六二、李忽蘭吉傳。經世大典佚文「站赤二」(『永樂大典』卷一九四一七) 至元十六年五月二十日、同九、至元十六年九月(同卷一九四二四)。

- (44) 前掲杉山『大モンゴルの世界』二一七頁。

- (45) 韓政の家傳には「至元十三年、西羌を討つに、相威國王、兵を領し、即ちに嘉議大夫・漢軍元帥監軍事を授く」とある。韓政が「西のかた大磧に入り」、勝利の後、臨潢に至ったことが記されている(袁桷『清容居士集』卷三四、「韓威敏公家傳」)。張元節は、至元十三年に「征西萬戸」となり、征西元帥府の副都元帥に拔擢され「遠征」した(『國朝文類』卷五〇、張起巖「濟南路大都督張公行狀」。拙稿「李璫の亂後の漢人軍閥―濟南張氏の事例―」(『史林』七八一六、一九九五年)第二章参照)。

- (46) 『元史』世祖本紀、至元十三年正月丁卯朔、閏三月丁酉、六月辛未、七月丙辰、十四年三月辛卯。同卷二二八、阿里海牙傳。『國朝文類』卷五九、姚燧「湖廣行省左丞相神道碑」。
- (47) 『元史』巻九、世祖本紀、至元十四年六月丁亥・同卷三一、奥魯赤傳。

- (48) アウルクチの家系については、前掲松田「河南淮北蒙古軍都萬戸府考」(同『On the Ho-nan Mongol Army, 50, 1992』

および前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」G・ジヤイル部族チヨルカン家、参照。

- (49) 『元史』巻九、世祖本紀、至元十四年三月癸丑。
- (50) 『元史』巻三一、懷都傳、至元十四年。
- (51) 『元史』巻九・一〇、世祖本紀、至元十四年六月丁亥、至元十五年十一月丁未。

- (52) 『元史』巻一三二、昂吉兒傳。

- (53) 『元史』巻十一、世祖本紀、至元十七年十二月庚午。

- (54) 『元史』巻二二九、唆都傳、同卷一三一、忙兀台傳。

- (55) 『元史』巻十、世祖本紀、至元十五年三月乙酉。

- (56) 『元史』巻十、世祖本紀、至元十五年八月辛巳・同卷一三一、忙兀台傳。

- (57) 『南臺備要』『憲臺通紀』『元典章』からも、設立にいたるクビライ政權内部の状況は知ることができない。

- (58) 『永樂大典』卷二六一〇、一葉裏。硬譯體については亦鄰真「元代硬譯公牘文體」(『元史論叢』第一輯、一九八二年)参照。「任命する」と譯した語は「倚付」である。これはモンゴル語の *ishu*「ゆだねる、任命する、委任する」の譯語と考えられる。通例、*ishu* は「委付」と硬譯されるが、「倚付」と譯される場合もある。「委付」と譯された例としては中村淳・松川節「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」(『内陸アジア言語の研究Ⅷ、中央ユーラシア學研究會、一九九三年』三七〜四八頁。この碑の第二、三截に各二例。および『元朝秘史』の傍譯三二例。「倚付」と譯するのは一二六八年、一二八〇年か一二九二年のものとされる整屋重陽萬壽宮聖旨碑で

ある。蔡美彪『元代白話碑集錄』（科學出版社、一九五五年）二三頁、照那斯圖『八思巴字和蒙古語文獻』Ⅱ文獻匯集（東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所、一九九一年）二二～二七頁参照。硬譯文のみだが、一文書中に「任命する」の意で「委付」「倚付」雙方を使っている例がある。『元典章』卷三三、禮部六、道教、「宮觀不得安下」（至元十四年十一月）。類似的語に「倚附」があるが、『華夷譯語（甲種本）』來文「疊加思千戶狀」（二三葉表）では、*jiage*「信頼する、頼りにする」の傍譯として用いられており、意味に若干の差異がある。

(59) たとえば、官名では耶律楚材の「中書令」や、官廳名では「中書省」「行中書省」など。

(60) この金陵の地誌は、至正四年、當時この地にあった行臺の命により編集刊行されたものである。行臺はこの時期『南臺備要』と（至正）金陵新志の雙方を編集させていたのである。

(61) 『南臺備要』のほか、『憲臺通紀』『元典章』所載。異同については、植松正「元代條畫考（三）」（香川大學教育學部研究報告「第一部第四七號」一〇四～一〇五、一一六～一一八頁参照）。

(62) これらは「行御史臺を立つる條畫」のなかの「管軍官の、軍人を約束するをなさず、歸附する人口を掠買せしむるを致し、あるいは良人を誘説して驅となす、一切の百姓を侵擾する者は糾察せよ。」（『南臺備要』所載では第七條）、「管軍官の戦守の功勞を申報するに、私に循い實ならざる者は糾察せ

よ。」（第八條）に相當する活動であらう。

(63) 『元史』卷二〇五、姦臣傳、阿合馬。

(64) 『元史』相威傳、魏初『青崖集』卷四、奏議（「至元」二十年五月日）。

(65) この間の事情は『元史』卷一三、世祖本紀、至元二十二年正月乙未、二月辛酉・同卷二〇五、姦臣傳、盧世榮、參照。

(66) 『永樂大典』卷二六一〇、五葉裏。『元史』本紀では、至元二十二年二月戊辰（二十五日）に、引用記事と同様のアントムの發言によって行臺の移動、存續が決定する記事がある。『南臺備要』の「三月」は二月の誤記であらう。

(67) 註(62)に引用した二條も管軍官への監察に関わるものであった。それ以外の條文は次の通りである（『南臺備要』所載の順）。邊境に聲息有るに即ちに申報せざる者は糾察せよ（第四條）。隨處の鎮戍の、もし約束號令の嚴ならずして、衣甲器仗整わず、あるいは管軍官の錢物を取受し、軍を放ちて役を離れしめ、並びに逃亡を虚申し、名を冒して代替し、私自に占使し、商販營運せしめ、あるいは佃戸となすとの一切の不公は、並びに糾察せよ（第六條）。管軍官の、逃亡する軍人を起補するに、存心に弊を作し、軍戸を騷擾し、軍前に實を得ずして用う者は糾察せよ（第十四條）。

(68) 第一章(1)(c)で、司空山の攻撃が、相威傳にも淮西宣慰使昂吉兒らの傳にも記されていることを述べた。相威傳が記年のみ誤ったのであれば、彼が昂吉兒らを率いて戦った可能性がある。

(69) 行臺に屬する軍に関わる記事が二つあるが、いずれもセン

ウ死後のものであり、且つその軍は弱小に過ぎて反亂鎮壓はおぼつかない。『元史』卷一八、成宗本紀、元貞元年（一二九五）七月己卯に「江南行御史臺に守護軍百人を給す。」「（至正）金陵新志」卷三下、金陵表、延祐二年（一二三二）の條、「初め、行臺大夫は哈必赤軍百餘人を用うに、皆軍籍の無賴にして、勢を恃み民を擾がす」。

- (70) 『元史』卷一三、世祖本紀、至元二十二年正月乙未・同卷十八、成宗本紀、元貞元年正月乙丑・同卷九八、兵志一、兵制、至元二十二年正月。

- (71) 『元史』相威傳、至元十四年に彼が述べたという「便民一十五事」の一つ「淮浙の鹽運司は行省に直隸す」は翌年四月に實行されている。『元史』世祖本紀、至元十四年四月壬午「淮・浙の鹽課は行省に直隸し、宣慰司の官は預かる勿からしむ」。

- (72) 至正四年に行臺が編纂させ刊行した『（至正）金陵新志』卷一、地理圖の第二は「南臺按治三省十道圖」である。圖の名稱からすれば南臺（江南行臺の略稱）が、江南の十道の肅政廉訪司（至元二十八年に提刑按察司が改稱）が屬下にあるのみならず、江南三省（江浙、江西、湖廣、福建は江浙に合併）が按治（この場合は監察を意味しよう）を通して行臺の下にあることを表現したものと考えられる。

- (73) バートルのクビライ政權成立における役割については、以下の論著参照。前掲杉山「クビライ政權と東方三王家」二八七、二九五頁、同『大モンゴルの世界』一七九～一八二頁、同『クビライの挑戦—モンゴル海上帝國への道—』（朝日選

書、一九九五年）九七～一〇〇、一一四～一一五頁。前掲拙稿「クビライ政權の成立とスベエティ家」一三四頁。

- (74) 『國朝文類』卷二四、元明善「東平忠憲王碑」、『元史』卷一二六、安童傳。なお、註(45)に引いた韓政の家傳には「相威國王」と表現されており、センウ自身が「國王」號を襲封した可能性もある。

- (75) 元代における官廳の屬人性は、ほとんど未解明である。センウの子アラール・ウッディーン（阿老瓦丁）は後に行臺御史大夫となった（『元史』卷二二八、相威傳）。

- (76) 江南に残留し南宋各地に進撃した將軍でも、浙東宣慰使の萬戸カイドゥのように中書省の官を帯びるに至らないなど、ここに示す行省を形成していった將軍たちより下位にあると考えられる者は省いた。また、福建省左丞の蒲壽庚は、江南平定の過程で、新たにクビライ政權に協力することになった泉州のムスリム商人の領袖であるため省いた。

- (77) 前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」三四、六〇～六六頁。

- (78) 『元史』卷一一九、木華黎傳附速渾察傳、「上京の西、阿兒查禿に營を置く」。彼が「中都行省の蒙古・漢軍を總べ」たことからして、この「上京」は、金の會寧府ではなく、後の元の上都を指していると考えられる。前掲杉山「大モンゴルの世界」一五二頁、同『クビライの挑戦』九〇頁参照。

- (79) 『元史』卷九五、食貨志三、歲賜、勳臣、木華黎國王と阿剌罕萬戸の項。前掲拙稿「元代華北のモンゴル軍團長の家系」B・ジャライル部族ブジェク家、B・ジャライル部族チ

ヨルカン家、参照。

- (80) 梅村坦「内陸アジアの遊牧民―ウイグル族における時間と空間」(『イスラム世界の人びと3―牧畜民』東洋經濟新報社、一九八四年)。

(81)

- 『元史』卷一二九、阿塔海傳。『元朝祕史』卷八、第二〇二節。村上正二『モンゴル祕史2』(平凡社東洋文庫、一九七二年)三六六―三六七頁参照。

THE ESTABLISHMENT OF JIANGNAN REGIONAL CENSORATES 江南行臺 IN THE YUAN DYNASTY

TSUTSUMI Kazuaki

In the latter half of the thirteenth century the Yuan Dynasty unified China after a one hundred and fifty-year period of division. To date, the study of Yuan rule in South China has been inadequate. This paper is intended as an investigation of the institution of Yuan rule in South China. It concludes the following:

1. After the fall of Xiangyang 襄陽 in 1273, the armies that advanced to the areas held by the Southern Song consisted of four corps. Moreover, Seng'ü 相威, from the family of the prince of the realm 國王 of the Jalair tribe, functioned as the commander of the Wutouxia 五投下 corps, which was one of these four corps. After the fall of Lin'an 臨安 and Yangzhou 揚州 in 1276, the commanders of the four corps made an advance against the rebellions of the Sirigi and others in Mongolia and the Western borderlands of the Yuan Dynasty. Lower-ranked generals of the armies remained in South China and formed four regional secretariats 行中書省. Among the commanders, only Seng'ü returned to South China and established the Jiangnan regional censorates at Yangzhou in 1277.

2. Jiangnan regional censorates consisted of two parts. One part was the Chinese office. It was responsible for the inspection of all officials, including ministers of regional secretariats, in South China. The other part consisted of the Wutouxia corps, responsible for suppressing rebellions in South China. Seng'ü controlled both of these sections.

3. Based on the following three factors, it becomes evident that the Jiangnan regional censorate functioned as the supreme department of the Yuan Dynasty in South China. (1) Only the Jiangnan regional censorate, among all offices in South China, was responsible for the supervision of the whole area of South China. (2) Seng'ü held a much more important place in the Qubilai Administration than did any of the generals who formed the four regional secretariats in South China. (3) Among the

commanders of the armies which advanced into the areas held by the Southern Song, only Seng'ü returned to South China.

THE DETERMINATION OF BOUNDARIES OF REGIONAL ECONOMIES IN TRADITIONAL CHINA: THE CASE OF TAIYUAN 太原 COUNTY IN THE EARLY TWENTIETH CENTURY

KURODA Akinobu

What is a regional economy? What determine its boundaries between inside and outside? Through an analysis of households in a village in Taiyuan county, it was determined that the peasants of traditional China received two types of cash incomes: Income from the sale of products at periodic markets, and income from the sale of products to outside markets. The latter enabled peasants to diversify their income sources. However, the prices of commodities intended for outside markets, such as straw paper, moved independently from the prices of commodities sold at periodic markets, such as cereals, where spot dealing was common. This fact implies that there existed economic borders that reflected the different price movements contained therein.

Jincizhen 晉祠鎮, one of four rural towns in Taiyuan county, functioned as a center of a payment community that covered periodic markets. Merchants in this town issued cash notes which circulated only within the immediate area. The payment community was enabled to respond to the fluctuations of currency demand through the supplying of credit by town merchants. The difference between markets, whether located within the payment communities or not, was responsible for the different price movements of commodities such as those mentioned above.

From this it can be concluded that markets in traditional China did not form a hierarchy based simply on size, as central-place theory suggests. Rather, they were, in fact, divided by autonomous payment communities.

The Shanxi provincial government, under the military lord Yan